

Title	「心」の概念化の日中対照研究 : 「心」を含む慣用表現を通じて
Author(s)	刘, 婉仪
Citation	大阪大学言語文化学. 2024, 33, p. 49-65
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97279
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「心」の概念化の日中対照研究：「心」を含む慣用表現を通じて*

劉 婉儀**

キーワード：「心」の概念化、慣用表現、日中対照研究

日语和汉语里有大量关于“心”的惯用表现。在中日的惯用语中，“心”作为比喻人的精神概念的词语被人们所熟知。根据《日本国语大辞典》（第二版）的解释，日语中的“こころ”指统御人的总体的精神活动的概念，而后引申出了人的思想，情感等各方面的精神活动等意思。汉语中，汉字“心”在象形文字中象征人的心脏，因此“心”的本义为“人的心脏”。古人将“心”误认为是思考的本源所在，因此产生了“心之官则思（《孟子》）”的说法，“心”也被认为是“脑”的代称。汉语里，“心”除了本义之外，还引申出了“思考”、“感情”等不同的语义。

我们日常生活中所使用的关于“心”的惯用表现的语义通常是它的引申义。比如汉语中的成语“撕心裂肺”，通常表示它的引申义（极度的悲伤和痛苦），而非它的字面意思（撕裂心肺）。日语中的“心”的惯用句“心が張り裂ける”亦是如此。认知语言学的观点认为，在这种语义的扩张现象中，人们对于事物的隐喻认知和转喻认知等认知体制起到了重要的作用。

作为认知语言学领域里研究隐喻和转喻认知的先驱，Lakoff & Johnson（1980）认为隐喻（Metaphor）和换喻（Metonymy）不仅仅是文学中的修辞技法，更是构成我们认知体系的认知途径。从这个理论出发，众多先行研究通过考察发现人们对于心的隐喻和转喻认知在“心”的语义扩张的现象中发挥着重要的作用，影响着“心”的概念化的过程。另外，Goossens（1995）研究发现，隐喻和转喻并不是两条平行线，也存在互相影响的情况。这种情况被命名为“Metaphtonymy”。但多数先行研究专注于“心”的隐喻或转喻研究，并没有仔细考察“Metaphtonymy”对于汉语和日语的“心”的概念认知的影响。

由此，本文将按照Lakoff & Johnson（1980）和Goossens（1995）的理论，以“心”的实体隐喻作为主要的切入点，通过包含“心”的惯用表达的语义扩张来对比研究汉语和日语中“心”的实体隐喻的相同点和不同点，在此基础上考察汉语和日语的“心”的概念化的异同，以及这些异同点背后的成因。本文通过考察发现，汉语和日语的“心”的语义扩张的过程中，在一些表达上，不止“心”的实体隐喻认知，转喻认知也有参与其中，并与“心”的实体隐喻相辅相成，共同构筑了作为实体的“心”的概念认知体系。

* “心”的概念化的中日对比研究 —— 以“心”的惯用表现为中心（刘 婉儀（LIU Wanyi））

** 大阪大学大学院人文学研究科博士後期課程

1 はじめに

日本語でも中国語でも「心」を含む慣用表現が多く使われており、人の知的・感情的活動を表している。私たちは日常で「心」を含む慣用表現の意味を字義通りに捉えるのではなく、その全体の慣用的意味を捉えて使っている。認知言語学では、表現の文字通りの意味から慣用的意味への拡張の過程において、メタファーやメトニミーといった認知プロセスが動機づけていると考えられている。例えば、「心が張り裂ける / 撕心裂肺」は一般に文字通りの意味ではなく、慣用的意味（悲しみや苦しんで心がいっぱいになる）を表す。その文字通りの意味から慣用的意味へ拡張することができるのは、〈心は脆くて傷つきやすいもの〉というメタファーが動機づけているからであると考えられる。一方、この表現ではメタファーだけが動機づけではない。人が外界からの強い刺激を受けると悲しみや苦しみの感情が生まれるので、胸に痛みを感じられるという因果関係を示すメトニミーも働いていると考え得る。

本稿は認知言語学の観点に立ち、「心」を「もの」に喩える慣用表現の意味拡張を切口にし、辞書やコーパスから「心」の慣用表現例を抽出してメタファーやメトニミーを用いて分析し、日本語と中国語の「心」がそれぞれどのように捉えられているかを考察し、異なる言語間の「心」の捉え方の共通点と相違点を明らかにする。

本稿の構成は以下のとおりである。2節では、先行研究を概観し、3節ではそれぞれ日本語と中国語の「心」の慣用表現の意味拡張を分析し、4節では3節の分析から日本語と中国語の「心」の概念化を対照して考察する。

2 先行研究

2.1 理論的概念

本稿で扱う理論的概念は Lakoff & Johnson (1980) によるメタファー論と Goossens (1995) による「メタフトニミー (Metaphonymy)」である。

メタファーは従来、修辞技法として研究されていたが、1980年代以降認知科学の発展に伴い、単なる修辞技法ではなく、世界を概念化する認知の過程にもつながっていると考えられている (瀬田, 2009)。認知言語学の観点からメタファーを研究する先駆的なものが Lakoff & Johnson (1980) である。彼らはメタファーが単に言語の問題ではなく、物事の認識の問題であり、私たちの物事に関する概念体系を構成していると主張し、概念メタファー理論を提案した。〈TIME IS MONEY〉のように、概念メタファー (Conceptual Metaphor) は具体的な概念を通して抽象的な概念を理解する認知的仕組みであり、個々の言語メタファーを生み出す基盤である。

メタファーは常に独立しているのではなく、メトニミーと協働して物事を概念化する

場合もある。Goossens (1995) はコーパスでの調査を通じて実際の言語使用の中でメタファーとメトニミーが動的に相互作用することを指摘し、その相互作用が存在することを指した用語を「メタフトニミー (Metaphonymy)」と名付ける。メタフトニミーは4つのパターンに分けられる。その中で、メトニミー由来のメタファー (Metaphor from metonymy)、メタファー内のメトニミー (Metonymy within metaphor) が多く見られる。メトニミー由来のメタファーの例を取り上げて説明する。日本語では「心が落ち着く」は「心」が心臓を表すメトニミーであり、文脈によって「落ち着く」の文字通りの事態が実際に生じ得るので、メトニミー (心臓の鼓動が落ち着く→人の心が落ち着く) として解釈できる。このメトニミーを前提にし、一般に文字通りの事態 (心臓の鼓動が落ち着く) が実際に生じていない場合も「心が落ち着く」と言えるので、その場合はメタファーとも見なされる。したがって、「心が落ち着く」はメトニミー由来のメタファーであるとも考えられる。

2.2 先行研究の概要と本稿の研究課題

日本語の「心」の概念を考察した研究として、田中 (2003)、鷺見 (2010)、松井 (2016)、後藤 (2020) があり、中国語の「心 (XIN)」の概念を考察した研究として、侯 (2001)、Yu (2008) などがある。日本語においても、中国語においても「心」に関する研究が多く行われているが、日中対照の観点から研究するものは少ない。その中で、認知言語学の観点から日本語と中国語の「心」の意味拡張を考察した研究として、方 (2010) があげられる。以下、本稿の分析に示唆を与えた鷺見 (2010) と方 (2010) を取り上げて概観し、問題の所在を明らかにする。

鷺見 (2010) は日本語の歌詞に使われた「心」の言語表現を考察対象として、認知意味論の立場から、「心」の捉え方と「心」のメタファーの経験的基盤を考察した。鷺見 (2010) の分類によると、以下 (1) の通り、「存在物」としての「心」の場合、「心」が具体的に〈脆い物体〉や〈燃える物体〉に喩えられていることがわかる。

(1) 〈心は存在物〉

- | | |
|-----------------|-------------------|
| a. 〈心は身体と別個の物体〉 | 例：心を奪われる、心にさわっている |
| b. 〈心は脆い物体〉 | 例：心が壊れる、心の脆さ |
| c. 〈心は燃える物体〉 | 例：心が燃える、心に火をつける |

(鷺見, 2010 : 73-75)

方 (2010) は日本語と中国語の「心」の意味拡張、概念メタファー表現を比較することで、いずれの言語も「心」を「容器」、「モノ」、「水平面」に喩えると共通することを指摘した。〈心はもの〉の場合、「モノの属性」、「モノの運動性」、「力の作用」という3つの領域において、日本語の「心」が「モノの運動性」「力の作用」にわたって広く写像されているのに対し、中国語の「心」が主に「モノの属性」に写像されていると考察した。しかし、なぜこのような日本語と中国語の相違点が生じるのかは考察されていない。

先行研究が残した課題として、以下の3点があげられる。

① 〈心はもの〉の場合、主にメタファーの視点から研究が行われたが、メタフトニミーの視点からの研究はまだなされていない。「心が落ち着く」、「心が痛む」のように、メタファーだけで説明し足りない（メトニミーも協働する）例があるので、補足する必要がある。

② 「もの」としての「心」の経験的基盤¹が詳しく検討されていない。また、その経験的基盤についての日中の共通点と相違点も考察されていない。

③ 方 (2010) は「もの」としての「心」が写像される領域をそれぞれ検討したが、「心」が「人」に喩えられる場合を検討していない（e.g. 「人」に喩えられる表現「心が病む/心中病」が検討されていない）。

そこで、本稿はメタファーだけでなく、メタフトニミーも取り上げて「心」の慣用表現を検討する。特に「もの」としての「心」に着目し、日本語と中国語の「心」を含む慣用表現の意味拡張を分析していく。また、先行研究が指摘していない「心」のメタファーと経験的基盤を補足し、<1> 日本語と中国語の「心」がどのように捉えられているか、<2> 「もの」としての心の表現の経験的基盤が何かという2点を研究課題として考察する。

3 日本語と中国語の「心」の概念化

3節では、まず日本語と中国語の「心」の意味拡張を示すことから、日本語と中国語の「心」の意味の異同を明らかにする。続いて、メタファーやメトニミーを用いて日本語と中国語の「心」を「もの」に喩える慣用表現の意味拡張をそれぞれ分析する。

¹ 例えば、「容器」としての「心」に関しては、容器のイメージ・スキーマ、時間的共起による経験などが経験的基盤として働いていると考えられている（方, 2010; 鷲見, 2010）。「もの」として「心」の場合、「心」の身体性が基盤として考え得る。後藤 (2020) は「胸」との比較から日本語の「心」の身体基盤を検討したが、日中対照の観点から「心」の経験的基盤を検討するものは少ない。

3.1 日本語と中国語の「心」の意味

辞書により日本語の「心（こころ）」の意味と中国語の「心（XIN）」の意味を表1に分類して比較する²。

表1 日本語と中国語の「心」の意味の比較

心（こころ）	心（XIN）
基本義：人間の知的、情意的な精神機能を司るものである。	基本義：人間の心臓である。
派生義：	派生義：
ア) 性格・性分。 例：心が柔らかい	①精神や思考を司る器官である。
イ) 本心。 例：心にもない	②思考、精神、感情。
ウ) 気持ち・気分。 例：心が重い	例：心思（こころ）
エ) 考え。意志。 例：心を読む	③胸の中にある心の位置。転じて物事の中心、中央。
オ) 物事に対する興味・関心。	例：圆心（円心）
例：心を奪われる	④内心
カ) 配慮。気配り。 例：心を配る	例：心服口服（心服する）
キ) 記憶。 例：心に残る	⑤度量
ク) 度量。 例：心が広い	例：心寛体胖（心が広い）
ケ) 思いやり。 例：心を込める	⑥思慮
コ) 宗教心。信仰心。 例：心起こる	⑦心根。氣立て。
サ) 雑念。妄念。煩惱。 例：心を捨てる	例：心腸好（心根が優しい）
	⑧良心
	例：没心没肺（良心がない）

表1では、『日本国語大辞典』によると、「心（こころ）」は人間の知的、情意的な精神機能を司るものであり、「気持ち・気分」、「精神」、「性分」といった様々な精神的意味を表している。一方、『現代漢語詞典』により、中国語の「心（XIN）」は心臓の象形文字を象った語であり、「心臓」という基本義から「思惟や感情を司る器官」「物事の中心」へと拡張されると考えられている。現代中国語では、「心」が「心臓」と「精神」の両義を併用している。

中国医学の重要な著書『黄帝内経・素問』によると、「心者、君主之官也、神明出焉」（心は五臓六腑を統御した主であり、心から神明（精神の主宰）が生まれる）と記述されている。『孟子』の「心之官則思（心は思考を司る）」もみると、「心」は人の生理作用を司る身体の中樞である一方、思考や感情を司る器官としても働いていると考えられ

² 日本語と中国語の「心」の意味は『日本国語大辞典』（第二版）、『現代漢語詞典』（第七版）、『古代漢語詞典』（商務印書館、1998）、『クラウン中日辞典』（三省堂、2001）を参照した。

ている。また、Yu (2008) でも述べられたように、中国語の「心」という認知の中心的機能を果たす概念は、〈THE HEART IS THE RULER OF THE BODY〉という Socially-based metaphor を通して認識されている。このような認知システムは身体と宇宙の統一・対応（天人合一、天人相応）という哲学的な考えを集約的に示している。道教からの影響もあり、「心」は個体を越えて天地の心（「為天地立心（天地に心を作ってあげる→倫理道德の準則を作る）」）や自然の心ともみなされる。

日本語では、「心」の表現は主に精神的意味を表しているが、身体部位（心臓か胸）としての側面も残されていると考えられる（e.g. 「心が痛む」）。『広辞苑』では、「心」の意味が「禽獣などの臓腑を見てコル、またはココルといったのが語源か。転じて、人間の内臓の通称となり、さらに精神の意味が進んだ」と記述されている。『万葉集』や宮地（1979：82）にもよれば、「こころ」は「心臓」とかかわりのある語であるが、中古の漢文訓読文や辞書の中に限って臓器としての意味で用いられていたようである。そして中国医学の影響により、臓器としての「こころ」の代わりに、漢語系の「シン」「シンゾウ」「シンノゾウ」が使われ、明治中期以降次第に「シンゾウ」へと移ったと推測されている（宮地，1979：85-86）。

まとめると、日中の「心」は同じく精神的意味で用いられる語なので、共通点が多みられるが、異なる文化や習慣によってそれぞれ独自の意味が発展した。中国語の「心」は心臓から、メタファーやメトニミーによって思考や精神を司る器官、物事を中心や自然の心まで意味が拡張されている。日本語の「心」は精神的な意味で用いられているが、「心」の表現には身体的側面がまだ残っていると考えられる。

3.2 日本語の「心」を「もの」に喩える慣用表現の意味拡張

前節でもみたように、「心」は実体のある「もの」と結びついていると考えられる。辞書と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）で「心」を「もの」に喩える慣用表現を収集した総数の中から65例に絞り込んだ³。具体例を収集して検討した結果、「具象物（e.g. 「存在物」（鷺見，2010）・「モノ」（方，2010)）」一般と、「具象物」の中でも顕著に見られる「生き物（人）（e.g. 「人」（松井，2016)）」に喩える例を分けて考えたい。

³ 扱った辞書は『日本語大辞典』と『広辞苑』である。「心+ヲ/ガ/ニ/ノ+動詞/形容詞/名詞」のパターンで用例を収集する。収集した慣用表現を、慣用表現の文字通りの意味によって「心」を「もの」に喩えているかを判断する。そして「心」を「もの」に喩える慣用表現を65例取り上げて分析を行った。

3.2.1 〈心は具象物〉

まず「もの」の属性と動きに着目して「心」を「具象物」に喩える場合を見ていく⁴。

a. ものの属性

- (2) 心あり / 心なし <有無>
- (3) 心良し / 心悪し <性質>
- (4) 心長し / 心短し <長さ>
- (5) 心が軽い / 心が重い <軽重>
- (6) 心清し / 心汚し、心の鏡、心の垢、心の塵、心が洗われる、心の濁り<清濁>
- (7) 心が熱くなる、心が冷える、心が凍り付く <温度>

「心」は情・知・意の全てを司る存在であり、いずれの側面も「心」の具象物としての属性（軽重、長さなど）を通じて焦点化され（後藤，2020：50）、(3)～(6)のような表現を生んでいる。これらの表現はメタファーが動機づけとして、人の心の状態や気立てを捉えている。特に、「心」の「清濁」は、「水」や「鏡」といった「もの」の属性に関わっていると観察される。

一方、(7)は別の動機づけによって成立する。(7)では、身体部位としての「心」は血行が良くなると体が熱くなるという原因で、意欲に燃えているという結果を表すので、メトニミーと考えられる。それに対し、体の温度が下がると人が落ち込む、さらに下がると人が動けなくなり、恐怖や不安が高まるという因果関係も読み取れるので、メトニミー的動機が働いている。

続いて、「心」は石のようにかたくて動揺しないものである一方、脆くて傷つきやすいものでもあると捉えられている。人の意志・考えや精神などに関する側面を通じて「心」のかたさが焦点化されるのに対し、人の感情に関する側面を通じて「心」の脆さが焦点化されるという両極性が観察される。

- (8) 心が硬い / 柔らかい、心を磨く、心を砕く、心を粉に叩く、心に刻む、心が固い、心をほぐす <かたさ>
- (9) 心を引き裂く、心が引き裂ける、心（胸）が張り裂ける、心（胸）を打つ、心を痛める / 心が痛む、心がくじける、心に刺さる <脆さ>

⁴ 〈心は具象物〉というラベルは後藤（2020）により引用。このラベルで扱う用例が後藤（2020）と重なる部分もある。

(8) はメタファーを通して「心」という「具象物」の「かたさ・やわらかさ」を表現している。(9) は〈心は脆くて傷つきやすいもの〉というメタファーによって生まれた表現であると考えられる。人が外界からの強い刺激を受けると悲しみや心配などの感情が生まれるので、胸に痛みを感じられるという因果関係を読み取れるので、メトニミーともみなされる。これらのメタファー表現は、このメトニミーを基盤として、ものの損傷や脆さを通して後悔や悲しみなどの感情、人の精神の不安定を捉えている。

b. ものの動き

〈心は動くもの〉

b-1 《ものの動きと方向性を通して人間の興味・関心などの状態を捉える》

(10) 心が動く / 心を動かす、心が移る / 心に移す

心を寄せる、心を引く、心を傾ける

b-2 《ものの垂直移動を通して人間の喜びや失望を捉える》

(11) 心が高ぶる、心が弾む、心が浮き浮きする、心が浮き立つ、心が躍る

(12) 心が落ち込む、心が沈む

b-3 《ものの不規則な動きを通して人間の不安や心配を捉える》

(13) 心が揺れる、心が乱れる、心が騒ぐ

(14) 心が落ち着く、心がなごむ

(10) では、「心が動く」や「心が移る」は「心」の動きで人の興味・関心などの変化をメタファー的に表す。その中で、「心を引く」「心を傾ける」は「心」を相手の方向へ傾けたり、自分の方向へ引いたりすることで人の興味・関心の方向を示す。(11) と (12) は、「心」が上に行くと人は期待や喜びを感じるのに対し、下に落ちると失望を感じることを表している。ここで〈心は動くもの〉メタファーだけでなく、Lakoff & Johnson (1980) による〈HAPPINESS IS UP, SADNESS IS DOWN〉と、軽いものは上に浮く、重いものは下に沈むという力の作用による経験も基盤として働いている。

(13) と (14) はメタファー表現であるが、その中のいくつかの表現は単にメタファーだけではない。(13) の「心が騒ぐ」と「心が乱れる」は、心臓の鼓動が速くなると人がざわざわして落ち着かないというメトニミー的な基盤を持つメタファー表現、つまり、メトニミー由来のメタファーである。(14) の「心が落ち着く」も、心臓の鼓動のスピードが落ちていくと心臓の音が静まり、人が落ち着くようになるという原因と結果を表すメトニミーを前提にしたメタファー表現である。

3.2.2 〈心は人〉⁵

続いて、「心」を擬人化した表現を見ていく。

(15) 心が病む、心の病、心が疲れる、心が泣く、心の健康、心の栄養、心を育む、
心が癒される、心が成長する

(16) 心が声をあげる、心が悲鳴をあげる、心が叫ぶ

(15) ~ (16) では、メタファーによって「人」という概念にある要素（健康状態、動作など）が「心」の概念内の要素（心理状態、感情など）に写像されて理解される（松井, 2016: 17）。「心」は単に精神が宿る場所ではなく、人のように感情を持つものであると認識されている。また、日本語に「顔で笑って心で泣く」という表現があるように、表と裏を明確に区別しているようである。

3.2.3 まとめ

日本語の「心」はメタファーやメトニミーによって「具象物」と「人」として概念化されている。前者の場合、「心」はかたいもの、鏡と水のような清いもの、動くものだけでなく、脆くて傷つきやすいものでもあるとメタファー的に捉えられる。一方、「心」の動き、脆さ、温度に関してはメタファーだけでなく、身体経験に基づくメトニミー（心臓か胸のメトニミー）も協働していることがあり、メトニミー由来のメタファーが観察される。後者の場合、「心」の擬人化を通じて「心」は人のように行動して感情を持つ主体であると捉えられる。

3.3 中国語の「心」を「もの」に喩える慣用表現の意味拡張

中国語の慣用表現には慣用語（慣用句）、ことわざ、四字成語（四字熟語）などがある。本節では、3.2 節と同じ方法で中国語の「心」を含む慣用語と四字成語を中心に分析する⁶。

3.3.1 〈心は具象物〉

本節では「心」が具象物としての属性（形状、色、数量、温度、幅など）、ものの動きを示す慣用表現例を見ていく。

⁵ 松井 (2016) によるラベルを引用。ここで扱う使用例も松井 (2016) の一部と重なる。

⁶ 中国語の「心」を含む慣用表現例の出典：『現代漢語詞典』（第七版）、『漢語慣用語辞典』（商務印書館, 2009）、『漢日成語詞典』（商務印書館, 1988）、『クラウン中日辞典』（三省堂, 2001）。収集した総数の中から 56 例を取り上げて分析した。使用例の意味は『漢日成語詞典』と『クラウン中日辞典』を参照した。

a. ものの属性

- (17) 心腸熱 / 心腸冷 <温度>
 (18) 心腸好、心腸壞、心腸黒、心腸毒 <色、性質>
 (19) 一条心、一心一意、三心二意、心細如髮、粗心大意 <形状、数量>
 (20) 心眼多、没心眼、缺心眼、心眼活、心眼実、心眼死 <有無、数量など>

(17) ~ (20) では、「心」は「眼」「腸」などの身体部位と結びつけて人の精神活動をつかさどるものという全体的な抽象概念を表している。この抽象概念はメタファーが動機づけとして、「具象物」の属性（温度や幅など）を通して写像されて理解される。具体的に、「心眼」が「氣立て、心がけ」や「度量」などの意味を表し、「心腸」が「心根」や「心の状態」を表している（「心（臓）」が「腸」と一緒にメタファー的に拡張されている）。(20) では、「心眼多（「眼」を小さな穴として解釈。心臓に穴が多い→賢い）」、「心眼死（心の穴が塞がっている→融通性や柔軟性がない）」のような、人の機敏や思考の柔軟性を表す慣用表現が少なくない。ここで「心眼」の数量と塞いでいる状態を通じて「心」の知的側面が焦点化される。古代中国では「心」に「竅（穴、眼）」があるので、思考をめぐらすことができるという説がある。脳のかわりに、「心」が思考の座として認識されていたので、その認識の現れとしての言語表現が多く存在するわけである。

「心」の慣用表現の意味拡張にはメタファーとメトニミーの協働も観察される。(17) と (18) を例として説明すると、「心腸熱 / 心腸好（熱心な。心根が優しい）」、「心腸黒 / 心腸壞 / 心腸毒（冷酷で腹が黒い。心根が卑しい。）」のような表現は単純にメタファー表現というだけではない。人の心腸が赤くて正常な状態にいることは性質が良いことを、逆になる場合は性質が悪いことを示すという因果関係が読み取れるので、この因果関係をもとにしたメトニミーとも考えられる。このメトニミーを前提に、メタファーによって「心」の側面（氣立て・心根の良し悪し）を捉えることができる。ゆえに、メトニミー由来のメタファーであると考えられる。

- (21) 心胸硬、鉄石心腸 / 心如鉄石、匪石之心、刻骨銘心 / 鏤心刻骨 <かたさ>
 (22) 心腸軟、刃子嘴豆腐心 <柔らかさ>
 (23) 心肝肉、碎心裂胆、鈍心剝目、摧心剖肝、撕心裂肺 <脆さ>

(21) では「心」が石のような硬いものに捉えられているのは明白である。「鉄石心腸 / 心如鉄石（感情に左右されない）」のように、石の硬さ・冷たさを通して人の氣立てや意志を捉え、「匪石之心（石のように転がることがない→意志が変わらない）」のよう

に意志の強さを捉えている。「刻骨銘心（心に刻む）」は石の堅実で記憶や感動が長く維持されることを表している。いずれも、「心」の属性が「石」の属性を通じて焦点化される。

一方、(22)では「心腸軟（心が柔らかい）」「豆腐心」のように、「心」は柔らかいものと捉えられており、(23)では「心肝肉（心臓と肝の肉→最愛の人）」のように、ものの脆さを通して「脆くて傷つきやすいもの」として見立てられる。また、(23)「碎心裂胆（心肝ともに裂く→きもをつぶす）」「撕心裂肺（胸が張り裂ける）」のような、恐怖や悲しみなど激しい感情を表す表現がメタファーであるが、メトニミーを介して文字通りの事態が文脈によって実際に生じる可能性もあるので、メトニミー由来のメタファーであると考え得る。

(24) 心如明鏡、心如止水、白水鑑心、一片冰心 <清さ・明るさ>

「明鏡止水（澄み切って落ち着いた心）」という熟語もあるように、メタファーを介して「心」は「一点の曇りもない鏡」と「静かにたたえている水」のように捉えられる。「一片冰心」は文字通りに氷のような純粋な心を表すが、転じて清廉で栄華富貴に心を動かさないという慣用的意味を表す。これらの表現は鏡や水のものの属性を通じて「心」の清さ・明るさを捉えている。

b. ものの動き

(25) 心上心下、心跳到了嗓子眼、心慌意乱、心蕩神搖、心浮氣躁、心平氣和

「心」の状態が「もの」の動きを通じて焦点化され、(25)の表現を生んでいる。「心跳到了嗓子眼（心が喉まで跳ね上がった→非常に緊張する）」「心慌意乱（慌てて取り出す）」「心平氣和（心が平静で、態度が穏やか）」のような例は文字通りの事態が実際に生じないのでメタファーである。心臓の鼓動が速くなるとリズムが乱れたり、落ち着くと脈が収まったりするという身体経験に基づく因果関係を表すメトニミーが基盤として働いているので、メトニミー由来のメタファーであると考えられる。

3.3.2 <心は生き物>

最後に、中国語の「心」を「生き物」に喩える表現を見ていく。

(26) 心慈手軟（心が優しい）、心狠手辣（心が無慈悲だ→性格が陰険だ）、心醉神

迷（心が酔っている→物事に心を奪われる）、心痒難耐（心が痒くてたまらない→欲望が抑えられない）、心悦誠服（心服する）、心中病（心を病む）、心力交瘁（心が疲れ果てる）、哀莫大于心死（心が死ぬより悲しいことはない→絶望だ）

(27) 心懷鬼胎（心が鬼の胎児を持つ→腹が黒い）、疑心生暗鬼

(28) 狼心狗肺、蛇蝎心腸、鸚心鸚舌、人面獸心、仏口蛇心、梟心鶴貌

(26) と (27) は「心」を擬人化し、人の病や行為などを通して人の思考、気立て、精神状態などを捉えるメタファー表現である。「心」は主に〈人〉の領域にある要素「行為」に写像されている。身体部位である「心」が人のように振る舞ったりすることができるのは、「心」が思考や感情の主だけでなく、「身体」と緊密な関係性も持っているからだと考えられる。

(28) は蛇や狼などマイナスなイメージを持つ動物の性質を人の心に与え、全体的に「残酷で良心がない」「残忍だ」「悪辣だ」といったマイナスな意味を表す。これらの表現の中で、人の表と裏の不一致を表現させるために使われるものもある（e.g. 「仏口蛇心」「人面獸心」）。これは「心」が人の「裏」として、「表」としての「身体部位（顔や口）」と一致していないことが好ましくないと認識されているからであると考え得る。

3.3.3 まとめ

以上、中国語の「心」は感情や思考を司る器官として「具象物」と「生き物」の領域を通して認識されている。「具象物」の場合、方（2010）でも指摘されたように、中国語の「心」は「ものの属性」を中心に写像されている。その中で、「心」のかたさと清さについては「石」「鏡」「水」との接点を有している。「鉄石心腸」「豆腐心」のように、「心」が「喩えられるもの」を表す名詞と併記されて一つの表現になるのは特徴的である。また、具象物としての「心」の意味拡張にはメタファーだけでなく、メタフトニミーも動機づけている（e.g. (23) (25)）。一方、「生き物」の場合、「心」は「人の行為」を中心に写像される。「狼心」のように、「心」の所有者が動物に喩えられてその「心」の属性（悪）を表すことができるのは中国語の特徴と言えよう。また、「仏口蛇心」「人面獸心」などの表現にマイナスな意味が含まれているように、身体部位である「心」が身体と強く結びつけられるため、裏と表を明確に区別することが好ましくないと考えられる。

4 考察

本節では3節での分析に基づき、日本語と中国語の「心」の概念化を対照して考察する。まず、「心」を含む慣用表現の意味拡張からみる日本語と中国語の「心」の捉え方を見ていく。続いて、それぞれの捉え方の異同に関する経験的基盤を考察する。さらに、経験的基盤の共通点と相違点から異なる言語の「もの」としての「心」の概念化を明らかにすることを試みる。

4.1 「心」の捉え方の異同

日本語でも中国語でも「心」が精神や感情の源とされているので、「心」の捉え方の共通点が多く見られる。例えば、「心」を「もの」に捉える場合、それぞれ「具象物」と「人」に捉えることが共通している。前者の場合、ものの属性については、「心」のかたさを捉えるには石のようなかたいもの、「心」の清さを捉えるには「鏡」と「水」が用いられる。また、「心」の脆さを捉えるには、<心は脆くて傷つきやすいもの>というメタファーが動機づけていることが共通している。このメタファーでは「心」が他の身体部位との接点を有していることも観察される（日本語の方は「胸」、中国語の方は「腸」「肝」「胆」）。一方、「心が張り裂ける」「撕心裂肺（胸が張り裂けそうなほど悲しい）」といった身体経験に基づく慣用表現の意味拡張にはメタファーだけでなく、メトニミーも働いていること、いわゆる Goossens (1995) による「メタフトニミー」（メトニミー由来のメタファー）も多く観察される。

日本語と中国語の「心」の捉え方はかなり類似しているが、細かいところで相違点を見出すことができる。次の2点が相違点としてあげられる。

まず、3.2と3.3で扱われた例文の数と分析により、メタファーの視点からみると、日本語の「心」は「ものの動き」((10) - (14))や「人の状態」(15)など、広い範囲に写像されるのに対し、中国語の「心」は「ものの属性」((17) - (24))と「人の行為」((26) - (27))に集中して写像されることが窺える。中国語の「心」は人の生理作用と精神活動を主宰する器官とみなされるので、臓器としての機能（属性）を重視しており、人のように能動的に行動し、思考することができると捉えられるので、「ものの属性」と「人の行為」に多く写像されるのであると考える。それに対し、日本語の「心」は精神や感情を司るものであり、「心（気）を引く」「心（胸）が躍る」のように、「気」や「胸」との互換性から、外界からの刺激に敏感で反応しやすいという特徴を持っていると捉えられるので、中国語より「心」の動きを比喩的に表す慣用表現が多くある((10) - (14))と考え得る。

次に、管見の限りでは、中国語の「心」は身体感覚・反応に基づく「メトニミー由来

のメタファー」の表現が多いと観察される⁷。また、他の身体部位（腸／肝／肺など）と形式的に共起しており、一つのセットとなる起点領域の実体として理解されるので、日本語の「心」より、中国語の「心」は「身体」とより緊密につながっている概念で捉えられると考えられる。この点については、中国語では「裏（心）」と「外（顔や口など）」を一致させる方が好ましいと観察されることもその証である。3.1節でも触れたように、中国医学と哲学において、中国語の「心」が身体を主宰するものだけでなく、天地と合一するものであるとされるという全体的な考え方は「心」の捉え方に大きな影響を与えている。それに対し、日本語の「心」は身体部位としての側面が残されているものの、「心が離れる／心を奪われる」のように、身体と別個のものとして捉えられる（鷺見，2010）場合があるので、中国語ほど身体と緊密につながった概念ではないと考える。

4.2 「もの」としての「心」の経験的基盤

認知言語学の観点では、異なる言語や文化の比喩表現や慣用表現には言語や文化の差異を超えた共通性があると考えられている。日本語と中国語の「心」の捉え方の共通点からみると、「心」は目に見えない精神的概念であり、「心」の存在に触れたりすることはできないが、接触可能な物体に関する経験（ものの属性、運動性と貴重性）を活かすことによって「心」の存在を認識することが可能になる。また、「心に刻む／刻骨銘心」のように、私たちは石のような硬いものに文字や絵を刻むことで物事を記録して覚えること、「心が引き裂ける」「心肝肉」のように、脆いものが壊れやすいので大切にしないといけないといった共通の経験を通して「心」を認識している。このように「心」を認識して概念化する過程において、＜心はもの＞メタファー及びその下位メタファー群が認知プロセスとして動機づけている。一方、メタファーだけでなく、メトニミーも協働している場合がある。例えば、「もの」の動きと脆さに関しては、日中ともに「緊張や不安」には心が騒ぐ／心慌意乱、「深い悲しみ」には心が引き裂ける／撕心裂肺といった慣用表現が用いられる。人は不安な時に心臓の鼓動のリズムが乱れ、悲しんでいる時に胸のあたりで痛みを感じる。こうした感情に対応した身体経験（体温や心拍の上昇）に基づいたメトニミー的基盤はこれらのメタファー表現を支えている。

もう一つ考察したいのは「心」の清濁に関するメタファー表現の意味の成り立ちである。この場合、「心」が「鏡」と「水」に喩えられていることが日本語と中国語の共通点として挙げられた。結論を先に言うと、「心」の清濁に関するメタファー表現は「鏡」

⁷内訳：中国語は（17）と（18）合わせて6例、（23）「心肝肉」を除いて計4例、（25）6例、合計16例。日本語は（9）（13）（14）合わせて13例。数に大きな差がないが、中国語の方はメトニミー由来のメタファーの例が多く観察される傾向がある。

と「水」についての経験的基盤の上に成り立った百科事典的知識、哲学の思想を踏まえたものであると考えられる。中国語では、「明鏡止水」は「明鏡」と『莊子・徳充符』⁸にある「止水」を組み合わせてできた熟語で、邪念が無く、静かに落ち着いている澄みきった心の状態を表す。「明鏡止水」には、鏡をきちんと磨けば塵が付かない、静止した水が鏡として人を映せるといった百科事典的知識があるので、人の「心」を「澄み切った鏡」と「静止した水」に捉えられると考える。実際に「心」をこのように捉える文章が古くからある。例えば、宋の『朱子語類』（第九十七卷）に「聖人之心如明鏡止水（聖人の心は明鏡止水の如し）」とある。聖人は流水ではなく、静止した水を鏡とする。どんなことがあっても不動の心で対応しているという意味を表す。これは中国道教の「無為自然（人は知や欲にはたらかせずに自然に生きるままの方が良い）」という哲学的な考え方を示唆している。

日本語では、「心」の清濁を表すには「心の濁り / 心の垢」や「心の鏡」といった表現が用いられる。これらの表現は「心」の汚れ・濁りを雑念や煩惱として捉え、濁りが清まり、水で汚れや垢が取られると人の煩惱も消えることを表している。『日本国語大辞典』によると、「心垢」という仏語は煩惱が心をけがす垢であることに由来したと記述される。日本の古典である『徒然草』（第十七段）にも「山寺にかきこもりて、佛に仕うまつるこそ、つれづれもなく、心の濁りも清まる心地すれ。」という文がある。つまり、「心の濁り / 心の垢」のような「心」のメタファー表現を支えているのは「水」に関する百科事典的知識だけではない。仏教からの影響もあると考え得る。

いずれの言語も「心」の清濁を捉えるには「水」と「鏡」が用いられ、両者が緊密な関係を持っていることがわかる。

5 まとめと今後の課題

日本語においても中国語においても「心」という精神的概念を「もの」を通じて認識している。日本は古くから中国の言語や文化と交流が続いており、お互いに影響し合っているため、「もの」としての「心」に対する認識の仕方はかなり類似している。この類似性は身体部位としての「心」の身体基盤に基づいていると考察した。そして「心」を認識する過程においてメタファーだけでなく、メトニミー由来のメタファーも認知プロセスとして動機づけていることが共通している。今後は日本語と中国語の「心」を含む慣用表現例を増やして分析し、4節で考察が不足している点（例えば、中国語の「心」

⁸ 原文は「仲尼曰、人莫鑑於流水、而鑑於止水。唯止能止众止。（「人々は流れる水ではなく、静止した水に顔を映そうとする。心の平静な人の元の人々が集まるのはそのためだ」と孔子が曰く）」である。『四字熟語を知る辞典』（小学館、2018）を参照した。

は人間以外の生き物に喩えられる場合が少なくないが、日本語の「心」が人間以外の生き物に喩えられる場合は少ないという中国語と日本語の相違点を考察していない)を改善しつつ、4.2節で考察していない「心」の経験的基盤の相違点を明らかにしたい。また、通時的な考察も加え、日本語と中国語の「心」の概念化を再検討していく。

参考文献

- Goossens, L. (1995). *Metaphonymy: The interaction of metaphor and metonymy in figurative expressions for linguistic action*. In Goossens L, Pauwels P, Rudzka-Ostyn B, Simon-Vandenbergen A, Vanparyset J (Eds.), *By Words of Mouth: Metaphor, Metonymy and Linguistic Action in a Cognitive Perspective* (pp.159-174). John Benjamins.
- Lakoff, G. and Johnson, M. (1980). *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. (邦訳：渡部昇一・下谷和幸 (1986)『レトリックと人生』大修館書店)
- Yu, N. (2008). The Chinese heart as the central faculty of cognition. In Sharifian F, Driven R, Yu N, Niemeier S (Eds.), *Culture, Body, and Language: Conceptualizations of Internal Body Organs Across Cultures and Languages* (pp.131-168). Mouton de Gruyter.
- 後藤秀貴 (2020)「こころの理解考：「むね」との比較を通じて」『言語文化共同研究プロジェクト レトリックとメディア』43-58, 大阪大学大学院言語文化研究科.
- 鷺見幸美 (2010)「日本語の歌詞に見る「心」の概念化」松下千雅子・エドワード・ヘイグ・杉村泰 (編著)『戯れのテクノロジー』73-80, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.
- 瀬田幸人 (2009)「メタファーについて」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』(142), 49-59, 岡山大学大学院教育学研究科.
- 田中聡子 (2003)「心としての身体－慣用表現から見た頭・腹・胸－」『言語文化論集』24 (2), 111-124, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科.
- 方小贊 (2010)「日本語と中国語における「心」の比較－意味拡張、概念メタファーの観点から－」『比較文化研究』(93), 197-207, 日本比較文化学会.
- 松井真人 (2016)「日本文化における「心」の概念メタファー」『山形県立米沢女子短期大学紀要』(52), 11-20, 山形県立米沢女子短期大学.
- 宮地敦子 (1979)『身心語彙の史的研究』明治書院.
- 侯玲文 (2001)「“心” 义文化探索」『汉语学习』03, 54-60.

データソース

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)

西尾實(校注)(1957)『方丈記 徒然草 日本古典文學大系 30』岩波書店.

福永光司(1956)『中国古典選 莊子』朝日新聞社.

謝辞

本論文の作成にあたり、指導教員の早瀬尚子教授と大森文子教授より丁寧なご指導をいただきました。さらに、査読者の先生方からも有益なご指導、ご助言をいただきましたこと、この場を借りて心よりお礼を申し上げます。また、ネイティブチェックしてくださった篠崎秀紀さんにも感謝の意を表します。なお、本稿の不備や誤りは筆者に帰するものです。

